

ノ二千百三十二石餘ノ田税ノ地ニ今ハ私ニ領シ神境ニ同貢獻スルヲナシ舊ハ神領ナルヲ
 更ニ謂ハス天正慶長間志摩州鳥羽城主九鬼大隅守喜隆ニ奪居セラレテ成敗ニ從ヒ困窮スル
 ニ及テ郷長三村宗衛門頼リニ 公訴ニ及ヒ元和八年四月訴狀ニ勢州度會郡二見浦三鹽役人
 百二十人ト書タルモ此舉ニノ神役ノ廢センヲ愁訴セリ其時奉行花房志摩守官ニ告上ノ寛
 永十年六月十三日舊ニ復シ二宮供進ノ御鹽勤仕ノ外ハ永ク公役ヲ免除ノ 台命ヲ蒙リテ神
 境ニ還附セシナリ今時ハ御鹽掌役ノ者七十餘家アリ三村喜多井某二人ヲ郷長トス三村其時
 ノ功勞ヲ賞ノ二見郷ヨリ水代現米百石ヲ恩謝ニ輸シ公訴ノキ祈願ニ據テ毎歳一石二斗ヲ外
 宮子良館ヘ供進スル例トハナリ又猶郡宰花房志摩守ノ功勳ヲ賞シ寛永十八年生祠ノ意ニノ
 花房氏ノ英名ヲ標ノ石碑ヲ西村ノ東松林ノ中ニ建リ 外宮神領目錄云當時御賀二見郷兩大
 神宮ヘ於外宮奉御鹽名吉開三掛斬二桶苞コフノリ一桶大角豆みなぞ六入松柏二駄空苞云
 此地撰集及家鈔ニ咏スル哥多シ後世風咏スル處若干記スルニ違アラス玉櫛篋ノ冠辭ハ尽
 シ傲フ處ニノ例哥多端ナリ然レモ其一二大倭州二上山ニ咏ルアリ此ニ舉テ其傳聞ヲ希ヘシ
 續古今
 ひは玉の夜は明ぬらし玉くしけふたかみ山に月かたふきぬ
 家持
 續後拾遺
 ほとよきすわかすも有かな玉くしけふたかみ山の夜半の一聲

猶其餘有ルヘシ後攷チ俟モノナリ

新古今

明かたき二見の浦による波の袖のみぬれて沖津嶋人

實方

金葉集

玉くしけ二見の山の木の間より出れば明る夏の夜の月

源親房

新勅撰

我戀はあふよもしらす二見瀉わけくれ袖に浪ろかけゝる

家行

新後拾遺

二見潟月かたふきて更る夜に伊勢島遠く千鳥鳴なり

等持陀贈左大臣

夫木

夏の夜は玉ゆらもなし玉くしけ二見の沖に明る月かけ

家隆

冬はみつ二見の浦の朝氷とけぬ程こる鏡なりけれ

慈慶法師

時ならぬ花も咲けり玉くしけ二見のうらの秋の白さく

少將内侍

明て見る芦間の鶴の玉くしけ二見の浦に秋は來にけり

洞院攝政

玉かつら二見の浦の夕つく夜明ても見ぬは夢路なりけり

順徳院

全 後三條範定

あひに逢は、二見の浦に寝もしなん荒磯浪の枕なりけり

全 讀人しらす

紫の貝よる浦の二見瀉浪のよするろ花と見へける

全 長明

古里の大原山やいかならん二見の浦の今朝のはつ雪

全

袖の上は波かあらぬか二見瀉くもらぬ月に村雨の聲

全 夫木

心せんひとつ御法のすゑまでも二見の里は人へたてけり

全 戒秀法師

玉くしけ二見の里の卯の花は有明の月とおもひけるかな

九月はかり二見の里に侍りけるにある人のもとよりさかりなる櫻を一枝たて

せたりければつかはしたりけるに

時ならてまたもさくらの花さかり春をふた見といふへかりけり

全 山家集

今ろしる二見の浦のはまくりをかひあわせとてねほふなりける

全 西行

浪こそと二見の松に見へつるは梢にかゝる霞なりけり

全 御集

二見瀉春の撫屋の夜半の月けふりいとへは霞む空かな

全

秋の月ひかりろまさる玉くしけ二見の浦の明かたの空

全

あはれなり二見の浦の暮かたにはるかに寒き海士の釣舟

全 躬恒

玉くしけ二見の浦に住む海士のわたらひ草はみるめなりけり

全 重之

玉くしけ二見の浦の中に落る月の影ころ鏡なりけり

全

いつくろや二見の浦にありといひし心入てどはまし物を

全 拾遺愚草

どゝめ置し袖の中はや玉くしけ二見の浦は夢もむすはす

全

玉くしけ明れば夢の二見瀉ふたりや袖の浪に朽けん

全

玉くしけ二見の浦の秋の月明るにつらさわたら夜夜空

全

ます鏡二見の浦にみかよれて神風清き夏の夜の月

拾玉

あかぬとて明くれ見れば玉くしけ二見の浦の松のむら立

全

春の色も誰れさめけん伊勢の海二見のうらの明ほのゝら

玉陰

いかさまに我身をわけて二見瀉命にかへてあふかひもみん

桑門集

浪のうへに出るも入るも二見瀉月に恨る山の端ろなき

御裳濯集

二見瀉月すむ夜半の玉くしけ明なは秋の色やなからん

正治二年百首

霞行春の鹽屋のけふり哉二見の浦の明ほのゝら

文治六年百首

いつしかと雁は來にけり玉くしけ二見の浦の明かたの空

建保百首

かさねても袖の涙の玉くしけわけて二見の恨どろ見る

全

わかれてはあかぬ名残をます鏡二見の浦の有明の月

全

二見瀉絶す涙の玉くしけたまゆら袖のかはく問ろなき

全

伊勢島や二見の浦のかたし貝あはて月日をまつろつれなき

寶治二年百首

二見かた浦の嶋く明る夜の遠かた鹽や春ろさひしき

文應二年百首

二見瀉夜風身にしむ海士人は明行までや衣うつらん

全

二見かた千年の松に名をとめて神や子の日に引はしめけん

弘安參詣記

玉くしけ明くれ君を祈りつゝふた心なき身どろしらなん

御返し

祈るらん心も清き玉くしけ二見の浦のかひろあるへき

天文十一年大神宮千首

くもりなき空をうつして海原や二見のうらの浪の月影

全

浪まぐらいとはんものか玉くしけ二見の浦の雪の明ほの

全

四辻宰相中將

文明十六年十二月二十五日右大將家月次

義教

度四百四十

士佛參詣記

ひとかたにたのむへさかは浦の名のふたみちかくる人の契りは
老の浪立かへるへき身ならねは二見のうらの名をも頼ん

家集

源國永

玉くしけ二見の浦は一夜あけて今朝春のたつ浪静なる

全 二見破却の爲に御本所田丸にいたり馬を出され七日の未一戦にやふれ江といふ所を
詰の城にたのみけるかいひかひなく一さへもこらへずして落行ければたはれに 全

玉手箱ふみやふれてることのみ頼めと江ころたまたらさりけり

清渚 今一色村ノ東高代濱及庄村ノ北打越濱ヨリ以東立石崎松下村ノ界ニイタル海厓ノ砂漠
ノ地ノ惣名トスヘシ二見浦立石崎ニ限ルニ非ス士佛參詣記及二見誌等ニ立石崎ニ隸ル處ニ
舉ルト云ヘモ今博ク指メ稱スルナリ萬葉集對馬州竹嶋浦ニ詠セリ同名也 坂士佛參詣記云
俗ニハ此ヲハ立石ト申ス也大淀浦アリタリニ近ク伊勢島ノ方モ遙ニ詠ヤル南ニ歩ミヲ進ム
ムレハ白キ砂雪ヲ啣ケリ清キ渚ノ名チアラハシ青キ浪風ニ漂ヒテ荒キ濱邊ノ岸ヲ驚カス云
々 二見誌云清渚今稱立石崎邊曰清渚云 勢陽雜記云清渚今一色ヨリ松下村マテノ間ノ

濱ヲ云ト傳ヘタリ見ワタス景色モ餘所ニ勝レヲ清淨ノ地下ミヘ侍ル此邊ニ高シロノ打越立
石祓島ナト云アリ如何ナル垢穢モ此ニテ水ムスヒ祓チナスキハ清ヲカニナル渚ナレハ名ニ
シ負フコ宜ナリ云 神境雜話云清渚ノ義モ垢離スル故ニ名クニヤト云ヘリ毎歲九月十三
日外宮一禰宜以下高城濱ニ祓禊ノ行事アルニ據テ常人ノ立石崎及打越濱ニ垢離スルモ同義
ニメ其禊事ヲ修スルノ地ナル故ニ清渚ノ名アルニ據ルナヘシ
後撰集 おゝやけのつかひにて伊勢にまかりてかゝりまふてきて久しくとはす侍りければ

少將内侍

人はかる心のくまはきたなくて清き渚をいかて過けん

新千載

いせの海や浪のよるくすむ月の影ころ清き渚なりけれ
左近中將義詮

玉葉釋教善光寺如來御哥

いせの海のみよき渚はさもあらはわれ我は濁れる水にやとらん

續後拾遺

いせの海の渚も清き住鶴のちとせの聲を君にきかせん
大伴黒主

夫木

いせの海清き渚に駒とめて都のつとに小貝ひろはん
師光

全 藤原八束朝臣

度四百四十一

松かけの清き渚に玉しかは君を見まさんさよき濱邊に

御集

二見瀛月をもみかけいせの海の清き渚の春の名残に 後鳥羽院

千五百番

いせの海清き渚の浪もたゞ君にこころをよするなりけり 讚岐

建保百首

いせの海春の浦まに霞わけて玉やひろはん清き渚に 定衡

全

よる浪も清き渚のすさひまてかひある春の海士の袖かな 俊成女

全

いせの海清き渚も霞つゝ春は沙干の玉もひろはん 兵衛内侍

全

伊勢の海や清き渚の夕浪にひろはぬ玉は瑩なりけり 忠守

催馬樂

いせのうみのさよき渚の汐貝に名のりろや指ん貝や拾はん玉やひろはん

天文十一年大神宮千首

三條大納言

ひかりもて玉藻にましる軒もやさよき渚の心をはしる

續草庵集

いせより人の哥を見せ侍りしに返り事遣はつとて包紙に

頼阿

いせの海のさよき渚の名もしるし光ことなる玉を見る哉

式外堅多神社

立石茶屋村ヨリ立崎ニイタル松林ノ中ニアリ路ノ右ノ旁ニ詣人ノ便ニ遙拜所

アリ本社ハ路ヨリ一町許西ニアリ三津村ニ属セリ或ハ堅田ニ作ル内宮廿四處ノ攝社ナリ

祭神二座佐見都日子命佐見都比賣命 倭姫命世紀云活目入彦五十狭茅天皇廿五年丙辰三月

二見浦江御船爾 坐于時大若子命 爾 此國名何問給白久速雨二見國 止白支爾時其濱爾 御船留給

氏 坐時佐見都日女神參相支 汝國名何問給 支 御詔乎毛 不聞御答毛 不白氏 以堅鹽多御饗進支 倭

姫命慈給堅多神社定給支 于時大若子命其濱乎 御鹽並御鹽山定奉支 内宮延曆儀帳云堅田社

一處稱東方堅田社形石座正殿一字長四尺四寸高六尺五寸玉垣一重長四尺二寸高八尺坐地一

町三百步四至東山南公田西溝並百姓家北大海 寛文攝社再興記云堅田社此社モ延喜式社記

ニハ無之候彼書ニハ大國玉社ヲ載候ヘモ寶殿敷地無之由社記ニモ見ヘ申候間此社ハ其カハ

リニ入候テ可然候ハント存候事但此社ハ二見ノ役人建立申候而只今結構ナル事ニ候其分ニ

可然候事 伊勢舊跡聞書云倭姫世紀ニ佐見都姫堅田社堅鹽ノコトハ佐見都姫ハ佐見都彦命ノ

妻ナリ不聞不白ハ敬慎ハ嚴肅ニノ敢テ言ハサルノ貌ヲ狀ルノミ堅鹽ハ燒テ固メタル鹽ナリ

今猶神供ノ鹽是ナリ堅田社ハ佐見都彦佐見都姫ヲ祠ルト云二見卿三津村ニアリ堅鹽ヲ献ル

ニ由テ堅田ト号スルカ田ハ助語歟世俗吃咽ヲ患ヘ暗啞ナル者ノ類此社ニ祈ルナリ又大神ノ

朝夕ノ供御ノ御鹽ヲ此地ヨリ獻ルモ此ヲニヨルナリ云

立石崎 堅田社ノ南ニアリ立石舊名ハ坂士佛參詣記ニ載テ康元中既ニ名アリ江村ニ至ル海瀨
ニ二箇ノ大嵩相對ノ並立リ狀門闕ノ如ク一ハ小一ハ大ニノ質蒼黑色木理アリ紀伊州玉出島
山ノ伽羅石ニ伯仲セリ其双嵩ノ間ニ注連繩ヲ牽タリ是海中ノ興玉石ヲ拜スル意ナリト云然
レモ諸州諸客及ニ宮境ノ土人此ニ詣リテ汚穢ヲ祓禊スルニ海水ヲ浴スル處ナリ是日本紀云
伊弉諾尊曰吾前到於不須也凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戸橋之檉原
而被除焉遂將湯皿滌身之所汚乃舉言曰上瀨是太疾下瀨是太弱便濯之中瀨也此遺事ニ據レリ
文保記云浴鹽之條可爲敬神儀也出于濱有煩者汲鹽不可有子細歟トミヘタリ今習俗ニ潮水ヲ
汲テ竹筒ニ盛リ或ハ此浦ニメ海藻ヲ採テ收乾シ汚穢ヲ潔スルニ浴湯ニ和スルハ此謂ナリ此
海藻ヲモクシホト稱ス藻屑鹽ノ言ナリ無垢鹽ニ作ルハ非ナリ又前號ニ載ス宮河ニ浴シ或天
神濱産屋濱高代濱打越濱等ノ忌服穢ノ輕重ニ據テ其禊スル地ノ異ナルハ日本紀伊弉諾尊
ノ濯之中瀨沈濯於海底潛濯於湖中浮濯於湖上等ノ輕重ノ意アルニ同シ前ニ云此岩頂ニ注連
繩ヲ所牽ハ興玉神ノ拜ニハ非ス其地ヲ清潔ニスルノ禁禦ト謂ヘシ興玉ノ名義ハ後号ニ辨セ
リ立石崎ハ此双嵩ニ據テ名ヲ冒ス處ナリ又此地ニ至ルニ立石茶屋ヨリ海峴ニ至ル處ニ八九
尺許ノ巨石ヲ並テ詣客ノ踏テ潮水ノ滿ル處ヲ躡行ク飛石アリ潮水多ク滿ルキハ此石ニ激メ

飛奔ス故ニ往テカクシ此處ヨリ北ニ山路アリ是ヲ越テ立石巖ノ垢離スル地ニ至ルナリ此路
ニ小流アリ鮫川ト名ク橋アリマガウ橋ト云是小河ノ橋ニメ前號山田中島町ニ小河橋アリ方
俗金剛橋ト云ニ同シ此山頂ハ即大夫松ノ生スル處ニメ立石崎ノ後ニ峙タリ又此飛石ヲ躡ル
邊ニシヤグシノ祠ト云アリ白晝ニ燈ヲ點ノ詣客ニ錢ヲ勸ル處ナリ三狐神ト稱ス是酒殿神宇
賀御魂命一名ニメ三狐ノ轉ナリ本郡有瀧村同名ノ祠ナリ三宮神或社宮司ニ作ルハ非ナリ是
土俗ノ私ニ置處ナリ敢テ舊地トスルニアラストイヘモ勢陽雜記所載ニメ明曆中既ニ此祠ア
リ故ニ載ス

興玉石 立石崎ヨリ東六町許海中ニアリ潮水ノ盈ルキハ見難シ土俗云立石ノ頂ニ牽處ノ注連
繩ハ此拜處ニノ猿田彦大神ノ靈ニシテ海神ニ崇ム興玉岩ヲ遙拜スルナリト云名所圖會ニモ
載テ海童神ハ日本紀ニアリ猿田彦大神ニハ非ス海神ヲ拜スルナルヘシト解セリ此惑神境雜
話ニ興玉石俗猿田彦神ノ化玉フト云ヘモ記錄ナシトイヘリ是方俗ノ諺ニノ此地江村松下ノ
堺海瀨ニ猿田彦石猿田姬石ト云ニ箇ノ崑アリ各俗稱ニノ舊記所據ナシ凡テ二見郷ハ宇治郷
ニ隣リテ宮域興玉拜所同郷中村興玉森等猿田彦大神ヲ遺蹤トスルニ據リ此地ニ興玉石ノ名
存スルニ因テ猿田彦石及姫石等ノ名ヲ冒犯セルナリ其猿田彦ニ對シ姫ト稱スルハ雌雄ノ義
ニメ名ク處晒フヘシ又興玉ノ名ハ前ニ謂猿田彦大神ヲ指ス處ノ名義ニ同シカラス渙魂ニノ

海洋中ノ神靈ト稱スルナリ是舟人ノ崇敬スル處ニシテ或ハ詭テ船ノ靈神モ猿田彦神ヲ祀ルニ同シク興玉ノ字ヲ此ニ假ルニ據テ惑ヲ生スルニ至レリ海神ヲ表スル處ト云ハ得タリ興玉ノ字ノ混用スルハ未辨故ニコ、ニ錄ス 勢陽雜記ニ塩干石海中ニアリ世俗鏡石ト云潮ノ滿ルキハ隠ルト云意ハ屈ムノ義ナルヘシ云 云是興玉石ノ注ニ同シ各條興玉石ヲ不載今古異名スル處トイフヘシ

大夫松 立石崎ノ立石ノ後江村ヨリ西北ニ列リテ山嶺ニ一老松樹アリ高四丈許四五圍許ニ及ヘリ東洋中及海西安濃津及一志浦等ヨリ眺ムニ一山ノ妨ルナキニ據テ能ク望タリ海舶ノ標トスル處ナリ此樹下ニ巨石磊落ノ多ク聚リ石墻ノ狀アリ方俗伊勢三郎義盛居城ノ址ナリト云故ニ此樹ヲ鎧掛松或義盛物見ノ松等ノ名アリ或大夫ノ名ニ據テ仁木左京大夫義長此ニ倚レリ故ニ名ツク或ハ勢陽雜記ニ秦始皇五大夫ノ封爵ノ談ニ據テ此松ヲ贊スル名ナリト稱シ又東國ヨリ本州ニ至リ二宮ニ詣スル客船ノ此樹ヲ標トシ彼地ハ伊勢ノ大夫ノ居處ナリト指スニ據ルノ名ナリト俗解セリ各其實ヲ得ス伊勢三郎義盛及仁木義長等ノ所居ノ徵ナシ猶其分野狭小ニシ殊ニ幽僻ノ地城居スヘキ處ニ非ス五大夫ハ誣タル臆斷ナリ稍ク船客ノ指ス處ヲ是トスヘシ敢テ名アル老樹ニ非ストイヘル是舊昔ノ古蹟ノ謂アルニ據テ遺名ヲ存セルナリ文明三年國司北畠大納言材親外宮祠官村由掃部助武則カ軍ヲ征セシト武則カ敗卒二見浦

ニ走竄ノ此地ニ砦ヲ築ク處ニシテ其遺址ナルニ據テ石屏及渥等ノ趾ヲ存スルナリ此地ハ同郷江村ニ屬スル處ニシテ今ニ然リ江村ニ犬牙ノ地ニシテ所謂江村城是ナルヘシ然レ一時ノ營ニシテ嚴重ナルニアラス其要害ヲ憑ムノミニ不日ニ敗走スル故ニ其全備セサルヲ今閱ノ知ヘシ北畠源國永家集云玉手箱ノ跡前二見浦ノ條ニ載ル如シ其餘江村ニイタリテ舊城墟ヲフカク索ルニソノ地ヲ得ス是此ニ必セリ勢陽雜記云取出松又平松云時繪明神ノ山上峯ニ聳テ一本ノ松アリ二見ノ江中ヨリ能ク見ユル云 其地ハ稍異ナリト云ヘル取出ノ名ハ砦ナリ城砦ノ謂ナルヘシ各條ニ大夫松アリ江村ノ山半ニ大木アリ綠葉毎年不出ト載ルハ各條姫小松ト云フ出スト同譚ナリ孰此地ノ勝景ノ物ヲ不詳ノ混スルナリ取出松大夫松ハ同樹ナルヘシ故ニ其砦跡ニ存スル處ノ古樹ニシテ今ニ至リ名ヲ稱スルナルヘシ其餘敢テ舊典ニ據ナシ又此山ヲ前賢所謂音無山ニ宛タリ其謂ハ夫木抄

長明

松やあらぬ風やむかしの風ならぬいつれの秋か音なしの山
此ニ據テ此老松樹ノ存ノ後世名アルニ牽強ノ音無山ハ是ナリト稱スルナリ音無ノ名ハ舊久ニシテ大夫松ハ近曾ノ賞スル處ナルニ其本據ヲ詳ニスルヲ得ス妄ニ稱スルニ據レリ新刊名所圖會モ此ニ倣テ大夫松音無山ノ上ニアリ仁木左京大夫義長カ城跡ナリ故ニ大夫松ノ名ア

リト云ハ妄誕ナリ仁木義長事實ハ大平記及吉野日記ニ載タリ此處ニ據ル典故ナシ此老樹前ニ記スルハ寛政中枯槁ノ今亡シ其故ハ其郡宰ノ令ニ據テ久志本村ニ鶴松新田ノ公穀ヲ藏ム倉庫ヲ修造ノ用ニ樹下ノ磊石ヲ運漕ノ取リ其根盤ヲ穿鑿ノ巨石ヲ動搖スルニ據テ枯萎スルニ至レリ後世若其地ヲ慕テ松樹ヲ栽ルト云フモ寛政中ニ至リ存スル文明中ノ古樹ニ非スト知ヘシ後人ノ所爲ニ大淀松ニ相同ト謂フナリ 立石崎ヨリ江村ニ通スル海岸ノ路旁ニ岳石ヲ峙テ寒風ヲ禦キ日光ニ映ノ暖温ナル地アリ方俗乳母カフトコロト稱ス 又立石崎ト江村ノ間海厓ニ突出スル巨岳鯨魚ノ偃臥スル狀ニ似タリ方俗クシラ石ト云其餘此海瀨砂中ニ珊瑚沙及鐵砂等ヲ産ス 又沙磧ノ中ニ白質ノ石アリ磨礪ノ研或石帶等ニ製造スルニ雪白色甚硬ク光彩愛スヘシ近世好事者多ク玩フニ至レリ新刊名所圖會或雜鈔ニ粗載ル處故ニ此ニ贅ス

江村 立石崎ヨリ南三町ニアリ潮水干タル時ハ海厓ヲ至ル八町潮滿ル時ハ山路アリ邇シ津村ヨリ二十町十五間 本邑東西四十三間南北三町二十間 民屋百四字 江村ノ名義ハ村邑ノ南ニ五十鈴川朝熊川ノ二流小朝熊神社前ニノ分流ノ一ハ潮合川ニ澆キ一派ハ三津村ノ南ヲ經テ此地ニ東流ノ海ニ入ル又海潮沂リテ潮水合ノ江河トナル故ニ名クナルヘシ或繪村ニ作ル是此地ノ致景畫圖ニ比ノ賞スルノ名ナリ猶詩畫松ニ對ノ名ヲ冒ス處トモ云ヘリ孰好事輩

ノ詩材等ニ字ヲ假用スルナルヘシ舊典ニ所見ナシ

式内江神社 本邑ヨリ三町巽位ニアリ堅多神社ヨリ詣次ハ十二町アリ内宮延曆儀式帳ハ江村ノ西ニアリト載ス今俗詩畫明神ト稱ス古老傳云本邑往昔ハ江神社ノ東ニ居スル處ナリ漁獵ノ地ニ便宜カラス故ニ今ノ地ニ移リ棲メリト云然ル時ハ儀式帳ニ坐地一町東ハ溝並二郷ト載ルハ今ノ方俗ニ異ナリトイヘモ古昔ノ地ノ差タルヲ知ヘシ延喜式所載及内宮二十四處攝社ナリ 祭神未詳 倭姬命世紀云從其所幸行 五十鈴川 乃後入江川入坐 支于時佐美 留彦神 參相 汝爾 問給此河 乃名何詔白苔 支此河 乃流落者 五十鈴川後 止 支此所 爾 江神社定給 支云云 神名秘書云在二見郷天須婆留女命兒大歲御祖命也 内宮延曆儀式帳云江神社一處稱天須婆留女命兒長口女命形在水又大歲御祖命形無又宇賀乃御玉倭姬内親王定祝正殿一字長四尺弘五尺高六尺玉垣一重長四丈高一丈坐地一町四至東溝並郷南西山北神田 寛文攝社再興記云寛文三年十月十一日江神社ヲ建此社ハ二見郷江村ノ西三町程ナリ十四五間四方許ノ坐地ナリ所ノ者ハ詩繪明神ト云又寛文四年九月廿三日江神社神前社粟皇子社遷宮儀式各同前 江村生土神祠 本邑ノ南河厓ニアリ祭神八王子

詩繪松 坂土佛參詣記云江寺より麓の浦にくたりて眺望するに曲渚波を隔て所くの松繪に畫ることしこれや此音に聞ゆし詩繪の松ならんと恩へとも誰に問へしともたはへす磯も

の取る泉郎乙女に問へども答へず舟さしのはへますら男有もしやと尋侍りし程に此入江を
蒔江とや申らんろればしらすと云

浦松似畫夕陽裏

老眼摩娑費苦吟

水自細流通海脉

波横萬頃列天心

雲晴雲起山高下

潮去潮來月淺深

六十餘年漂泊處

江湖風景不如今

伊勢名所拾遺和哥集注云三津村ト注村トノ間ノ松原ヲ云

金葉集

大中臣輔弘

玉くしけ二見の浦のかひしけみまき繪に見ゆる松のむら立

勢陽雜記云蒔繪松又卷江松二見郷ニアリ三津村ト江村トノ間ニアル山松ヲ云一本ヲ指ノ云
ニ非ス或説ニ今一色ト西村トノ間ノ松原ヲ云又立石ノ南ノ山尾崎ニアリ一本ノ松ヲ云凡
ヘリ金葉集玉くしけ二見の浦の貝しけみ蒔繪に見ゆる松の村立此哥ヨリ名タルナルヘシ或
云江村ノ江ハ曲リテ山ヲ卷タル故卷江ト云其向ノ東方ニ見ユル松ヲ云ナリ右ノ哥モ纏江ト
蒔繪ヲ兼テ詠ル心ヲラン是ハ松下領ノ松ナルヘシ士佛法印參詣記云如此イヘルモ松下領
ノ松ノコナルヘシ 度會清在舊蹟聞書云江神社ハ神祇本源及神名秘書ニ大歳御祖神宇賀乃
御玉二座也ト云二見郷立石ノ南江村ノ西邊ニ社アリ村民堅田社ト對ノ奥ノ明神ト云又近邊
ニマキエノ松アルカ故ニ蒔繪明神ト云共ニ俗稱ナリ 今詳ニスルニ坂士佛參詣記云江寺ヨ

リ麓ノ浦ト指スハ今ノ江村ノ南ノ江川ナリ曲渚猶然リ其松樹ハ何處ヲ不知又此江ヲ卷江ト
稱スルニ據テ樹ニ其名アリトスルニ據テ蹢躅スルノ文章ナリ然レ凡此曲渚ヲ指ニ據テ後世
名所拾遺注ニ三津村ト江村ノ中間ニ存ス松林トス勢陽雜記是ニ倣テ三津江村ノ地ヲ指ス又
或説ヲ擧テ今一色ト西村ノ中間ノ松林ト云是ハ非ナリ今一色西村ノ地ハ二見郷ニノ二見浦
トハ指シ難シ其二見浦ヲ賞スルハ立石崎ヨリ南北數町ヲ謂ヘシ遠僻ノ地ニ及フヘカラス又
立石ノ南山尾崎ノ一樹ヲ云ハ非ナリ是前ニ載ス大夫松ニノ後人音無山ニ宛ル處タリ文明中
江村城址ニノ三百歳餘ノ名アル處ナリ金葉集士佛參詣記ニ遙ニ後ナルキハ前ニ名稱アルヘ
キナシ猶參詣記所ノ松畫に出るかことト云キハ一松ノ謂ニ非ス 又此江ハ曲リテ山
ヲ卷タル故ニ卷江ト謂ヒ其東ニ存スル樹ヲ指ス時ハ松下村ニ属ス處士佛所言モ此ニ相同シ
ト云ハ驚セリ蒔繪卷江訓同シト云ヘ凡金葉集所咏ハ其名相等カ故ニ讀ミ合セタルニ非ルヘ
シ其謂ハ卷江ト云舊名此江ニアル時ハ玉櫛笥二見ナトノ冠辭兼合モアルヘシ卷江ハ後人ノ
臆斷ナリ上件ノ妄誕ニ據テ舊蹟聞書江神社近邊ニマキエノ松アルニ據テ蒔繪明神ト云キハ
三津ト江村ノ間松林ヲ指スニヨレリ各非トスヘシ今按スルニ金葉集大中臣輔弘所咏玉くし
け二見の浦の貝しけみ云此歌ハ二見浦ノ致景ヲ玉櫛笥ノ狀ニ摸ノ介石ノ滋生スル處ヲ螺
鈿ノ巧ニ目撃シ茂松ノ蒼鬱タルヲ描畫ニ寫シタルニ擬ノ其冠辭ヨリ設作ル處ノ秀歌ナリ猶

一木ノ謂ニ非ルハ松のむら立ハ群松ノ列リ立ル意ナリ惣ノ歴代勅撰及歌鈔等ニ蒔繪松ト云
 ナ咏スル處ノ後作ナシ其謂ハ此一首ノ哥ニ限り其致景ヲ摸タル意ニノ名勝ニ非ルカ故ナリ
 濱萩及百枝ノ松例ニ異ナルヲ知ヘシ然ルニ後世蒔繪松ト稱スル老樹アルニ惑ヒテ其地其樹
 ナ指スハ大ニ僻言ナリ猶三津ヨリ以東松村ニ至ル江河ハ前ニ載ス五十鈴川ノ下流ニノ山岳
 ノ間ヲ流テ幽僻ノ地ナリ然ルニ此地ニ此名ノ樹アルト云ヘテ強テ哥ニ咏スヘキニアラス又
 咏スルニ倣フトキハ後人所咏アルヘシ其證哥ナシ此後世ノ惑ヲ生スルハ士佛カ所言ニ據テ
 其蒔繪ト稱ス樹アルヘシト探ルニ及テ愈泥塗ニ陥リ卷江經江等ノ穿鑿ニ拘泥ノ益溝洫ニ斃
 ルニイタル嘆スヘシ度會常彰博見ニノハ濱萩百枝松千枝杉大碓松蒔繪松等ハ一山一浦一國
 ノ所有トノ二見浦ノ地方ニ生スル處ヲ金葉集ノ哥詠ニ所賞ト憶フヘシ蒔繪ト稱ス列樹一株
 ニ限ラス其樹アリト云ハ大ニ非ナリ惑フトス不足

潮音山大江寺 江村北山腹ニアリ立石崎ヨリ八町方俗江寺ト稱ス是舊名ナリ 眞言宗

伊勢順禮第一番本尊十一面觀世音行基大士作

江寺なる佛の誓ひふかき海二見のうらに見ゆる立石

仁王門ノ額ハ弘法大師ノ筆ト云古刹ナリ 士佛參詣記云山陰を遠くめくれる入海の方を尋
 ねて江寺と申觀音の靈地にまいるぬ苔踏のはる石はしは盤折ツラにて溪のせゝらき音幽なり

黄葉をはらひてふるさあを尋ね青竹に携りて遙なる峯にいたる近頃まで僧房なども有け
 るとかや申傳れども世の中の静なるぬによりて禪徒の止住すへき便もなし海士のすみか四
 五宇あるはかりなり寒灯かゝけす漁舟の浪をやく影をのみ見る霜鐘うこかすいたつらに樵
 路の斧の音の風にたくふ響をのみ聞一花一香のつとめも絶ぬれば千手千眼のちかひもなき
 か如し云々 此寺ノ麓ニ清泉アリ至冷ニノ味淡甘ナリ俗龜井ノ水ト稱ス毎年六月十五日内
 宮贊海神事ニ此寒水ヲ汲テ郷民ヨリ禰宜祠官ニ進ル例アリ今詳ニスルニ舊昔ハ江寺トノミ
 稱シテ後世ニ大江寺ヲ命スルナルヘシ今ノ村邑ヨリ山路二町許石階ヲ登リテ山腹ニ至ル寺
 坊アリ康元中ハ參詣記ニ載ルニ寺刹ハ荒廢ノ民屋四五宇ヲ存ストイフキハ其寺刹ノ地ハ古
 昔ヨリ固有スル處ニノ今ノ地ニ同シ其時既ニ山下ニ民舍纔ニ固ヨリ遺レリ今時ノ村邑ノ多
 シ居スルハ前ニ云江神社域ノ東ヨリ此地ニ遷居スル處ナリ勢陽雜記明曆中ニ此傳説アリ其
 編集スルニ古老ノ所謂ト云キハ明曆ニ至リ百年ニモ及ヘシ今ニ至リ二百六十餘年本邑ノ遷
 居ノ有スル處ト知ヘシ其江神社以東ニ居スルト云ハ延曆儀式帳ニノスル處ニシテ千餘歲以
 前ノ舊邑ナリ寺刹及村邑他ニ異ニシテ千古ノ舊蹟トイフヘシ 勢陽雜記云 釣釜姫小松ノ
 處ニアリ蓋釜ヲ釣釜ト云フ 今詳ニスルニ江村ト松下村ノ中間江淮ノ中ニ一堆ノ森アリ方
 俗釣森ト稱ス其地雜記所載姫小松ノ生スルトコロニ非ス地方異ナリ猶鹽釜ヲ釣釜ト稱ス言

ニ據ハ古昔鹽ヲ燒タル地ナル シ今本邑及松下ニ其業ヲ作スナシ其本據未詳シテ雜記所言姫小松釣釜森退リ石大夫松取出松等其方位今所稱ニ異ナリ如此奇勝今古不差ニ有ヘシ其探勝スル時ニ鹵莽ニ相混ノ記タルニ似タリ各兒戯ノ譚ニ同シト云ヘ凡雜記所載ニ據テ此ニ再言ノ猿田彦石 猿田姫石 同處釣釜森ノ良位ニアリ江淮中ノ巨石ナリ姫石ハ松下村傾天王森ノ東ノ水厓ニアリ是立石崎洋中ノ興玉石ヲ猿田彦大神ノ靈石ト俗稱スルニ據テ此ニ岳モ對ノ名シ處ナルヘシ俚語ニシテ本據ナシ猿田彦ノ妃妻ト謂ヘキ名ナシ哂笑ノ至リナリ蘆浦 名所拾遺和哥集云二見郷ノ内江村ト松下村ノ間ノ浦ヲ名スト古老傳ナリ

弘長元年百首

常盤井入道

漕かぬり猶見て行ん伊勢島や島めぐりする芦の浦風

拾玉

慈鎮

あしの浦のいときたなくも見ゆる哉浪はよりても洗はさりけり

名寄

中親

風ろよく芦の浦間の夜半の月かゝみをかけて舟かどろしる

勢陽五鈴遺響度會郡卷之十七終

勢陽五鈴遺響度會郡卷之十八

松下 江村ノ巽位江淮ヲ隔テ十四丁三十間ニアリ此間江開川舟涉アリ村次朝熊ヨリ四町六丁二十間是三津村線舟川ヨリ橋ノ江ヲ經テ至ル朝熊川ノ下流東ノ岸ナリ本邑東西五十五間南北三丁八間 民屋六十九宇 松下ノ名義ハ山林ニ傍テ松杉樹等多シ故ニ稱スナルヘシ

式内神前神社 本邑ノ巽位神崎山ノ東麓海崖ニ臨ム處ニアリ内宮二十四處攝社ノ内也 祭神一座荒前比賣命 倭姫命世紀云此河流落者 五十鈴河後 止 支 此所 爾 江神社定給 支 從其所幸 行 齋 交荒崎姫神參相 支 汝國名何問給白 久 天照皇大神御前荒崎 止 支 恐 志 止 詔 氏 荒崎神社 乎定給 支 内宮延曆儀式帳云神前神社一處稱國生神兒荒前比賣命形石坐倭姫内親王定祝正

殿一字長四尺弘五尺高六尺坐地一町二百步四至東大溝北同南西山 下 畧 神名秘書云神前社在宇治郷松下國生神兒荒崎比賣命形石坐在宇治郷松下村北神前每年六月十五日本宮禰宜到此海濱捕荒蠣御贄號贄海神事 神名畧記云神前社一座荒崎姫命 寛文攝社再興記云寛文三年十月十一日神前社ヲ建是ハ松下村ヨリ十町許北大一ノ端大山ノ根ニ建二三十間四方程アリ但カリヤノ森ト云 九月十六日内宮ヨリ正員禰宜一人來于今神事有之社ノ四至西ハ大海被崎也其外ハ山ナリ又云同四年九月廿三日江神社神前社粟皇子社各遷宮儀式同前

祓嶋 或祓崎ト稱ス神崎神社ノ前ヨリ海中ニ至リ一町許神崎山ノ岬突出スル處ナリ海中ハ岳石連リ偃臥ノ平ニ座スヘシ海潮滿ルキハ隱テ見ルナシ土俗其岩ニ御座岩魚盤石笏立岩ノ名アリ是毎歲六月十五日內宮禰宜神人等此ニ至リ荒蠟海松等ヲ采テ翌十六日月次祭由貴大御饌ニ供進スル處ノ料トス荒蠟ノ御贄ト稱ス及東洋飛嶋山ニ對シ祓禊ヲ執行ス贄海神事ト稱ス後飲宴アリ外宮濱出神事ニ粗同シ御座石ノ名ハ其座列スル處ヲ指ス或庖丁烹煎スル處ヲ魚盤石ト稱シ祓禊ヲ修スル處ヲ笏立石等ノ名ヲ冒ス此神事ハ內宮年中行事ニ其式詳ナリ海菜ノ類ハ悉ク草苞ニ裹テ持歸レリ其草ハ同郷一字田村若ノ山ト云地ニノ刈收メテ用トス例式ナリ故ニ祓嶋祓崎等ノ名アリ勢陽雜記志州神嶋條ニ魚盤石神樂場祓嶋ノ名ヲ載ス非ナリ是混合スル誤ナリ猶神樂場ノ名ハ此神事ノ時ニ神崎神社ノ傍ニシテ神樂役人ノ奏スルノ地ナリト云フ

神崎山 神崎神社ノ西松下村ノ後ニ登タル山ナリ 嶋長明伊勢記云西行法師住侍りける 安養山といふ處に人々可よみ連歌などし侍りし時海邊落葉といふ事をよみける 夫木

秋をやく神崎山は色さびてあらしの末に海士のもしは火

勢陽雜記志州神嶋ノ條ニ此哥ヲ引據ノ神嶋山ニ作レリ又名所圖會伊勢記詞書ヲ舉テ海邊落

花ニ作ル各非ナリ海邊落花ニ題スルキハ哥ノ意解シ難シ落葉ノ隱題ニ聞ヘシ秋月ノ景致此ニ含メリ

潜嶋 神崎神社ノ巽位神崎山ノ岬海岬ニアル巨岩ニ洞穴アル潮水涸ルキハ人其空ヲ潜ル戯トス潮水滿ルキハ至リ難シ故ニク、リ嶋ト名ク一堆ノ島山ニ非ス其岬ノ山ハ悉ク壘石ニ立石崎ノ如ク突立スル岩ヲ指ノ云立石崎ヨリ八町許南ニアリ潮涸ルキハ海崖ヲ至ルヘシ 式外許母利神社 神崎神社北ノ山ノ岬ニアリ海崖ニ臨ム平林ノ中ニ坐ス方俗神崎社ニ對シ上ノ小森ト名ク北上南下ノ方位ナリ小森ノ稱ハ社號ニ倣タルナルヘシ 祭神粟嶋神御魂 內宮延曆儀式帳云粟嶋神御玉形無粟嶋神ハ即道主命ニ粟皇子神社ニ所祀ナリ名社十五社ノ內ニノ內宮ノ末社ナリ 舊蹟聞書云江村ノ東南ニ當ル此社ノ森ヲ村民稱シ下小森ト云社ノ上ノ山腹ニアルヲ上小森ト云上小森ニハ社ナシ式外攝社神崎ニ坐ス許母利社ナルヘシ 度會延賢攝社參詣記云許母利神社一座粟嶋神御玉粟皇子ノ御玉ト云コナルヘシ神前社ノ上ノ山ニ森アリ社亡シ俗ニ上コモリト云今詳ニスルニ粟皇子神社ハ倭姬命定祀ニシ其地ヲ淡嶋ト稱スルニ據テ粟嶋ノ換用ノ即粟皇子ノ社號アリ其神ノ荒魂ヲ此ニ祀リテ許母利神社ト名ツシ紀州名草郡粟嶋ニ異ナリ又度會清在所言上小森ニ神社ナシ延享年間然リ寛文三年大宮司精長再興ノキニ其舉ナシ今神社一字アリ是後人ノ所建ナリ

式内粟皇子神社 同村ノ南伊氣ノ浦北厓松林ノ中ニアリ神崎神社ヨリ南三十町江神社ヨリ二十五町 祭神淡海子神 倭姬命世紀云活目入彦五十狹茅天皇廿六年丁巳冬十月甲子當奉遷于天照大神於度遇五十鈴河上云倭姬命御船乘給御膳御贄所地止定幸行嶋々國々在々爾朝乃御饌夕乃御饌止詔而湯貴潛女等乎定給天還坐ス于時神境定給支戸島志波崎佐和加太伎崎島定給而伊波戶居給而朝乃御氣夕乃御氣在所定給然而倭姬命御船留給而齋廣齋狹毛乃貝滿物與津毛邊津毛刺依來爾海乃鹽相和而淡有介留故淡海浦止號支伊波戶居島乎名戶島止號支波刺所乃名乎柴前支止號支從其以西乃海中爾七箇島在所從其以南海鹽淡廿支其島乎淡良伎乃島止號支其鹽淡滿溢浦乃名乎伊氣浦登號支其所爾參相氏御饗奉神神乎淡海子神止號支神定給支其所爾朝御氣夕乃御氣併奉支其名乎御氣島定給支云云注云淡海子神一名道主粟御子云鎮座本本云素盞鳥尊子氷沿道主注云亦名粟御子命元々集社記云在伊介島須佐乃乎命御玉道主命 神名祕書相同 寬文攝神再興記云寬文三年十月十一日粟皇子社神前ノ社ノ北東ノ方十四五町モ有之入海ノ中ニ五六間四方ノ島アリ此島ニ並テ南ニモ小キ島アリ何レモ白キ岳ニテ劔ヲソロヘタル如キノ石アリ然レモ和ナル石ニテ碎候岩ナリ此島ハ殿舎建處無之故先々歸リ申候以上三度罷越檢分仕候此島ハ伊勢ト志摩ノ國境ナリ又云寬文四年九月廿三日江神社神前社粟御子社各遷官儀式同前

牛頭天皇社 江村ヨリ巽位四町ニアリ五十鈴川ノ下流江河ノ舟涉ヲ經テ南ノ洲崎小丘ノ上ニ鬱林アリ本邑ニ屬ス一名御船ノ社トモ稱ス鳥居右ノ傍ニ末社石積アリ二鳥居右傍ニ石疊アリ末社ノ神拜ナリ正面拜殿壇上ニ末社御門玉垣一重左右ノ旁ニ神拜ノ石疊各一區アリ左ノ林中ニ神拜石疊一處アリ是ヨリ裏ノ鳥居ニ至ル正面向南向松下本邑ヨリ至ル詣路ナリ祭神素盞鳥尊例祭六月十四日京洛祇園會ニ倣テ此日ヲ祭奠ス 方俗蘇氏神祠ト云同城ニアリ直指秘傳抄云素盞鳥尊根ノ國ニ下リ玉ヲキ風雨ニ苦ミ諸神ニ宿ヲ乞玉ヘテ許サリケリ爰ニミツクノ國ニ巨且蘇民ノ兄弟アリテ巨且ノ家ハ豊ナレモ心不仁ナリ蘇民ハ貧ケレモ慈愛ノ心アリテ尊ノ御宿ヲ申テ粟飯ヲ進メ奉ル折節アハサノ國ヨリ暴疫鬼來ルヲ察玉ヒ蘇民カ家ニ第輪ヲ造テ帶サセ玉ヘハ翌日ニ至テ一村ノ内蘇民カ察ノミ恙ナク死ヲ免レタリ斯テ尊別ニ臨テ曰此後疫氣流行ノキアラハ蘇民將來子孫ト書テ門楣ニ點シ置ク者アラハ其禍ヲ退クヘシトナン教玉ヒシト云云公事根源云素盞鳥尊ハ即祇園ニ祭ル牛頭天玉ニテ又武塔天神也申スナリ南海ノ女子ヲ娶テ八王子ヲ生セ玉ヒ彼風雨ノキモ其女子ヲ連サセ玉ヒケリ云云牛頭大神ノ名ハ舊事紀ニ載タリ蘇民將來ノコトハ陰陽ノ說ニノ篋篋内傳或ハ備後國風土記ニ出タリ總國ノ中ニ村邑生土神ノ祠ニ神名詳ニシ難キハ今多クハ八王子ヲ祭祀ルト云是曆算家ニ陰陽道ヲ兼學ノ八將神ヲ稱シ八王子ニ混合ス說アリ本邦曆博士ノ陰陽道ヲ兼ルノ弊

習ナリ

伊氣浦 同處ニアリ東海ヨリ神崎ノ南ヲ盤旋シ松下村ノ南ノ山中ニ深奥ノ處ニ入タル江海ナリ即和名鈔伊介郷ニノ其地ニ存スル海浦ノ名ナルヘシ或伊介ニ作ル神風抄云内宮伊介御厨伊介郷ハ前條郷名ノ號ニ録セリ此地ヨリ志摩州荅志郡ニ堺ヲ處ノ諸島村邑大畧此郷ニ隸屬セリ今古差異アリ舊昔ノ所有ハ典故ニ據テ審ナリ石埼文雅郷談云伊氣郷ハ小濱村ノ西ナル伊氣浦ヨリ起レリ識者云伊氣浦ノ名ノミ存ノ郷ハ廢亡セリ今鳥羽ノ城中ニ相橋アリ其下流ハ堀口門ノ際ニ至ル昔ハ本町ト大里町ノ中間ヲ經テ常安寺ノ門前ニイタル當時ハ舟ヲ通セシト言ヘリ今モ溝アリ是ヨリ南東ハ志摩國荅志郡ナリ北西ハ伊勢國度會郡ナリ産神社モ各別ナリト言フキハ伊氣郷ニ屬スヘキニ似タリ鳥羽領ナル堅神村觀音寺ハ仁和寺ノ末ナルカ本寺ノ記録ニハ勢州度會郡堅神村ト在ナリト住僧ノ話ナリ云云今憶フニ伊氣浦ニ隣比スル小澤村ヨリ堅神村及鳥羽府城北ノ相橋ノ地ニイタリ本州松下村ヨリ南位山脉海水相連テ一隊ノ如シ上世ノ本州ニ屬スルハ更ナリ後ニ國郡ヲ分置スルニ據テ此郷モ纔ニ其名ヲ存スナリ此海浦ハ兩山ノ灣ニ所在ノ地ニシテ寒月甚温ナリ故ニ海魚多ク會聚ス殊ニ鮪魚多シ地方ノ民漁スルニ罟網ヲ容テ獲ルコト巨万ナリ俗鮪桶ト云其海面ヲ網羅ヲ桶ノ如ク張テ捕ル故ナリ志州鳥羽浦モ然リ其舟裝聚集軍戰ニ似タリ或云此處ヲ万葉集をみの浦夫木集れみの浦風ノ

知哥ヲ引テ此處ノ味トス其故ハ淡海ノ宇ニ據テアハツミノ罟ヲミノ浦ナリト必定セルナリ非トスヘシ前號安濃郡大部田ノ條小忌浦ニ審ニ辨セリ併稽ヘシ

浮島山 伊介浦ノ海涯ニアリ高嶽ナリ或云伊氣浦ノ海中飛島ノ東ニ在ル離タル一島ナリトイフハ非ナリ名所拾遺和哥集云松下村ノ東伊氣浦ノ見渡ノ離島ナリト云相同シ神宮雜例集云度會郡二宮御領其中伊氣御厨浮島御厨神風抄内宮伊介御厨ニ作ル憶フニ其洋中ノ孤島ニノ居民ナシ稻果柴薪魚藻ノ貢スヘキ處ニ非ス御厨ノ名アルヘキナシ故ニ飛島ノ東ト云ハ非ナリ此松下村ニ屬スル處ノ山岳ヲ指シ得タリトス

家集 延喜十七年伊勢齋宮の御料名ある所をかゝせ給へる御屏風に
 夫木 しばやはた身のうさ島に渡りなん沈みつゝのみ世を經ればうし
 寂阿 躬恒

深瀬 松にふく伊氣の浦風渡るらん浪にたゞよふ浮しまの山

飛島ヨリ以西火打島ノ中間ノ海ヲ俗稱ス火打島ハ今志摩州小濱ニ屬ノ日南島ト云ナリ此地海中大ニ深ノ東海ヨリ潮水ノ往還スルノ喉口ナリ故名ク日南島ハ内宮儀式帳云四至神境北比奈多島岳島云云是ナリ岳島ハ石崎文雅云雜例集所載ノ戸島ナルヘシ今斐島ト云ハ後人ノ岳ノ字ヲ訓シ訛ルナリ此島荅志郡ノ東北ニ在去コト二里許是恐非ナリ岳島ハ戸島ニ同

シ缶ハ音邊ト訓ス戸モ訓同シ倭姬世紀云故ニ談海浦 止號 支伊波戸居島 乎名戸島 止號 支云云
此戸島ニノ伊氣浦ノ地ナリ伊波戸居ハ齋戸ニ零ノ其御贄ヲ定ル所ノ神戸ノ謂ニノ戸ハ瓶ノ
同訓ヲ以テ轉ノ缶ノ字ヲ用タルヘシ然ハキハ今神島ハ古名藝島トストイヘ或ハ海龜多ク
棲處故ニ龜島ト稱ス後人神ノ字ニ轉タリ此地方ヨリ五里大洋中ニアリ其地遙ニ此ト隔テリ
猶世紀所載ノ方位ニ異ナリ其次柴前 云儀式帳比奈多島所志婆崎 云是ヨリ以南酒漣島
阿婆良岐島ト次第スル神境ノ封疆ナルキハ今志州鳥羽府城ヨリ東北ノ海島ヲ指ス處稍ク二
三里ノ間ニアリ神島ハ志摩三河ノ國境ニ邇シ此ニ次第スルニアラス古今志摩州ノ隸屬ス處
ト知ヘシ此地ヨリ以南ハ今志州ニ隸スル故ニ此ニ舉セス

飛鳥 神崎神社ノ南潛島ヨリ海中二十町良位ニアリ各孤島ニノ七箇連聯次第ニ相並ハリ飛テ
踏躑ヘキ狀ナリ故ニ飛鳥ト俗稱ス志摩州舊圖ニスウキ島ト記セリ洲浮ノ島ノ謂ナルヘシ舊
名阿波羅伎島ナリ淡良伎之島ヲ古典ノ正名トスヘシ其孤島ハ離々トノ七島不毛ノ一島アリ
其東ニ列レリ毛ナシ島ト稱ス其餘樹木森然タリ然レモ居民鳥獸ノ栖居スルナシ東洋中及朝
熊岳ヨリ能ク臨ム處ナリ此島志勢二州ノ界ニ志州ニ屬スルニ邇シ故ニ二州ノ地誌ニ混セ
リ上世ハ神境ニノ伊氣郷ニ屬スルハ分明ナリ 倭姬命世紀云波勃 乃名柴前 止號 支從其
以西 乃海中 爾 七箇島在所從其南海鹽淡甘 支其島 乎淡良伎 乃島 止號 支云云前號伊氣浦ノ條

ニ既ニ標出セリ内宮儀式帳云北比奈多嶋岳志婆崎島酒漣島阿波良岐島 云是ナリ柴崎ハ今
ノ志州荅志郡桃取島ヲ指ス鳥羽府ヨリ海東廿餘町ニアリ是東洋海ニ接スル處ニノ其海潮ノ
此地ニ至ル處ナリ飛鳥ハ其以西ニアリ故ニ方位ヲ閱ノ是ニ當ル處ナリ志陽畧志桃取島ハ夫
木所詠ノ磯等崎ニ填トス後稽ヲ俟ヘシ今此飛鳥ノ地ヲ經歷スルニ海潮以東ハ大洋ノ接スル
處ニノ至テ味鹹シ以西ニ二見浦ニ接シテ河流相接リテ味淡リナ世紀所載ノ神詔眞ニ然リト
ス其阿波良伎ノ名此ニ起レリ勢陽雜記飛鳥ノ俗稱ハ二見浦ヨリ飛超ヘキ地ニアリ故ニ名ク
ト謂ハ非ナリ二見立石崎ヨリ以南二十餘町ニアリ猶松下村神崎山ノ岬ニ隱蔽メ其七嶋ヲ觀
ルヘキナシ 伊勢名所拾遺和哥集云 あはらけ嶋はいけの浦の見わたしなり内宮年中行事
ニ御濱出といふ事あり其時此うたをうたふよしなり

あはらけの嶋は七嶋ろの中に毛なしはへて八島なりけり
或云夫木集あはらさや島は七ツと申せども毛なしかけては八島なりけり志陽畧誌引據スル
處同シ名所圖會島は七島と申せども毛なしかけては二作ル神境雜話内宮贄島ノ神事ニ舟子
ノ所謠ノ催馬樂ノ曲トスルニ相同シ各作者ノ名ヲ遺スかてハ萬葉集合ノ字ヲ訓セリ其ニ
意モ同シ 或云西行上人ノ詠スル處ナリ未詳是贊海神事ノ神樂哥ナルヘシ然ルキハ其名ヲ
載スル處ナシト謂ヘシ 今詳ニスルニ勢陽雜記及新刊名所圖會等各此地ヨリ以東西ニイダ

リ諸嶋ノ列名アリ皆志摩州ニ隸屬スル處ナリ猶本州ニ屬スル處方位異ナル地ヲ卷末ニ附セ
 リ今校訂ノ其方位ヲ分別ス 勢陽雜記云神嶋鳥羽ノ良渡海十五里人家五十字アリ云云引嶋
 長明伊勢記秋を燒神嶋山はいろきゐて云云ノ歌ヲ載ス磯間浦同處ト見エタリ万葉集月よみ
 の光をさよみ神嶋の磯間浦ノ哥ヲ引據ス各非ナリ神嶋ハ鳥羽府ヨリ四里ニアリ伊勢記神崎
 山ニノ此地ノ味ニ非ス既ニ神崎ノ條ニ辨セリ磯間浦神嶋ノ所有ニ非ス志摩州荅志郡桃取村
 ノ條ニ載ス神嶋ハ今古志州ニ屬ス本州ノ地誌ノ標スル處ニ非ス 又桃取嶋 鳥羽ヨリ一里
 飛島ノ東ナリ云云 是志州ニ屬ス本州ノ所隸ニ標スルハ非也 又宿嶋 是本州三津村ノ所
 有ナリ此地ニ列スル處ニ非ス遷幸ノ地ト雖モ二見浦トスルハ訛也 又馬乘石 未詳 又手
 節崎鳥羽ヨリ二里東北云云本州ノ所隸ニ非ス志摩州荅志郡荅志村ナリ是持統天皇伊勢行幸
 ノ時人麿所跡ノ哥ニ據テ此ニ舉タル訛ナリ 又波賀地濱志摩州ニ隸セリ本州ノ所有ニ非ス
 又飯ノ島鳥羽ヨリ十五里宿嶋ノ北ニ當ル云云 飯島ハ本州志州共ニ其名ナシ猶宿島ハ二見
 郷三津村ニナリ其北十五里ニ所有ト云キハ本州大湊ヨリ以北安濃郡津ヨリ白子浦ニ至ルハ
 シ是疑クハ宿嶋ハ本州南海ノ所有スル宿浦ヲ訛リ其以北ニ今飯滿村アリハンマト訓ス此地
 ヨリ十五里許ニイタルヘン妄ニ記ノ此ニ填ルト謂ヘシ 又伊良仰島 三州渥海郡ノ内鳥羽
 ヨリ東北渡海二十五里是三河州ニ屬スル處ニメ本州ノ隸スル處ニアラス然レモ上世本州志

摩州ハ一州ニノ後ニ分置スル處ナリ伊良虞島は後世志州ニ領屬スル時アリト云ヘモ本州ノ
 所有ニ非ス今ノ地志ハ上古ノ所置ヲ標セス今ノ地ノ所有ニメ上世ヲ論ノ方俗ニ論スヘシ不
 然キハ分別シカクシ雅俗交加ノ解シヤスキヲ此ニ舉タリ 又小濱鳥羽ヨリ北一里引遷幸記
 云有小濱取鷲老在 支云云 云是皇大神遷幸ニノ倭姬世紀ニ所載ニノ此小濱ノ名ニ據テ牽強スル
 ハ非ナリ此地ノ事實ニ非ス前号大湊條ニ辨セリ猶此地志州ニ隸レリ此鷲取ノ名ヲ妄ニ記ス
 ルニ據テ志陽畧記ニ再註ノ小濱村ノ條ニ誇言セリ各勢陽雜記ノ訛ヲ傳タルナリ 又篠島
 尾州知多郡ニ屬ス萬葉集所詠篠島及阿胡根浦ハ本州所有未詳篠島猶本州ニナシ 又云龜島
 二見ヨリ海路一里半男龜女龜ト云島ニツアリ今二見海中ニ其名聞ナシ行程一里有餘ナルキ
 ハ本州ノ所係ニ非ス所有ストイヘトモ志州ニ隸スヘシ或神島一龜島ハ填ル然レモ雌雄二島
 ナシ恐クハ前ニ載ス三津村ノ南岬龜森ノ重出ニ似タリ 又云酢我島 鳥羽ヨリ東南二里半
 今菅島ニ作ル志州荅志郡ニ屬セリ 又云飛幡浦 今ノ鳥羽ノ一也志州荅志郡ナリ云々 又
 云神島 兩所ニアリ一處ハ紀州堺鳥羽海路三十三里云云一處ハ尾州内海ヨリ海路廿三里伊
 良古島ハ三州ノ内篠島ハ伊勢ノ内此三島一處ニノ三國ノ堺ト云云各非ナリ一處紀州堺ト所
 言ハ本州ニ屬シ度會郡神崎村ナリ然レモ此志勢二州ノ堺此地ニ非ス前号ニ詳ニセリ一處尾
 州内海ヨリ海路二十三里ト云ハ志州荅志郡神島ナリ然レモ海路程甚遠シ内海浦ヨリ

至ルヘシ其地ニ非ルヘシ何處ヲ指ス未詳本州ニ隸ス處ニ非ストイフキハ此ニ標出スルハ
 妄ナリ伊良虞崎ハ三州渥美郡ニ属ス篠島ハ本州ノ所有ニアラス前ニ辨セリ非トスヘシ此三
 嶋三州ノ堺ト云ハ今ノ伊良虞神島篠島ハ尾三志州ノ鼎足ノ如ク犬牙ノ地ハ然リ本州ノ堺ニ
 ハ又云有瀧云 本州同郡ナリ然レモ此地境ニ非ス方位南北ニ遠也 大湊猶同シ 田會
 又云大湊ヨリ田會迄ハ志摩國ノ中伊勢國不交是ハ海路舟行ノ至ルノ謂ナリ陸行スル時ハ本
 州ノ境地ナリ 又云田會云 以下卷尾竈方六竈ト云ニ至リ各本州同郡ニ前号ニ標出ス志
 勢二州ノ堺ニアラス此地ニ列スルハ非ナリ其餘村邑地名海舶ヲ繼ク地等今古異同アリ猶訛
 謬多シ悉ク訂正ノ本郡首領ノ條ニ載タリ 新刊名所圖會所編各勢陽雜記ノ啜臈ニ是ニ從
 フ故ニ訛多シ神島云 云野間ノ内海陶器ヲ焼烟常ニ見ルト云ハ非也其陶工アル地ハ尾州知多
 郡常滑村ナリ 小濱云 云志州ニ属ス有瀧地方異ナリ前ニ辨ス此地ニアラス田會浦志勢二州
 ノ海堺ニアリ志州ノ屬ナリ有瀧ノ次條トス妄ナリ宿ケ浦是本州同郡宿浦ノ訛ナリ小字花岡
 チ隸スル時ハ南海ニ所在ノ地ナリ此處ニ非ス 神津佐廻間 慥柄 磯浦 相可ハ相賀ノ訛
 ナリ 阿曾津浦ハ阿曾浦ノ訛ニ各此地ニ非ス前ニ載タリ日和山佐田濱鳥羽浦波賀地濱酢
 我島各志州ニ隸屬ス大方釜ハ本州度會郡紀州ニ通シ此地ニ非ス志州伊良仰嶋非ナリ三州渥
 美郡ニ屬セリ悉ク勢陽雜記ニ從ヒ或ハ臆斷ノ舉ル處ニ書ノ所編其他ヲ不探ノ昏上ノ空譚ニ

據レリ故ニ妄誕多シ前人編著ノ遺存スル處其探地ノ悉ク履歷スルコト不能ハ概ノ記スルニ戰
 競ノ説ニ不論ノ欄筆者多シ後訂スル者猶詳ニ罄ス時ハ大幸此ニ至レリ

千尋海 或 千尋濱 神崎神社ノ前ヨリ飛島ニ至ル中間ノ深海ヲ方俗深瀬ト稱ス千尋ハ其海ノ深
 遠ナルヲ謂ヘシ又紀伊州ニ同名アリ其處詠ノ哥ニ伊勢海ト冒ス者ハ此地ニ名勝トスヘシ餘
 ハ未詳トイヘモ名所拾遺所輯天文十一年大神宮奉納千首中所詠千尋濱ハ本州ノ係ル處ニ從
 ヒテ此ニ舉タリ 又千尋ノ深者ハ此地ノ限ヘキニ非ス然レモ前人所稱ニ據テ是此ニ標ス識
 者善ク知ヘシ勢陽雜記云龜島ノ内ニアリ是龜嶋今ノ神島ナルヘシ同書別條ニ龜島ヲ載ス二
 見ヨリ海路一里半許男龜女龜ノ二島アリト云神島ニ異ナリ此地ヨリ行程一里餘トス志摩州
 ニ隸レリ其地未詳神島ハ府城ヨリ四里餘東洋中ニアリ東西洋ノ潮汐相激ノ急流深遠ニノ海
 門第一ノ險地ナリ其海底ノ千萬仞ナルハ測リ難シ故ニ其地ヲ臆ノ千尋海ニ牽強ス成ヘシ然
 レモ龜島神島各其地ヲ探ルニ非ス亦漁夫ノ傳聞ニ似リ其海洋ノ深遠ナルヲ賞スルニ所詠ト
 スルキハ勢紀ノ名勝ニ舉ルハ偏ナリ四方ノ海濱其地猶多シ然レモ此ニ名勝トスルハ二見ノ
 名ヲ賞スルニ據テ前世ヨリ所稱ニ從テ姑ク其名ヲ贅スルニ至ル所ナリト謂ヘシ
 後撰 西四條の前齋宮またみこにものし給ひし時心さしありておもふ事侍りける間に齋宮
 にさたまり給ひにければ其あくるあした神の枝につけてさしたかせ侍る

伊勢の海の千尋の濱にひろふとも今は何てふかひか有へき 敦忠朝臣

大和物語上巻今はかひなくおもはゆるかなニ作ル

家集

あひも見て君かきおなはけふはかり千尋の濱の名を流さなん 兼輔

全

行さきを心もどなくたのみつる千尋の濱のかひろうれしき 元輔

夫木

いせの海千尋の濱の眞砂もて君か代に經ん數はかるへん 全

全

打はへてなかけき御代をたのめれく千尋の海の網のうけ繩 西園寺入道大政大臣

全

永き日の海士のたく繩打はへてちひろの海に霞たなひく 家隆

全

たく繩を千尋の濱のくりかおしこれにや蟹の世を盡すらん 讀人しらす

千五百番

君も見ん千尋の海の底の色來んとし浪のわらわるゝまで 通具

天文十一年大神宮千首

打出る浪もちひろの濱風にくもりなき世の日の御かけかな 万里小路中納言

伊勢海

伊勢海ノ所詠ハ歷代ノ撰集ニ若干ナリ其一處ヲ指スニアラス一州ノ海瀕ヲ惣ノ所詠

ニ據レリ又伊勢島ノ所詠ハ上世志摩州ハ本州ニ隸セリ故ニ例ノ伊勢ノ名ヲ冒セリ後代ニ至

リ志勢二州ノ區別スル處ニ今ニ於ルハ本州ノ嶗島ノ所詠トスルモ有ヘシ非ナリ各志摩州

ニ係ル處ニ惟フヘシ別本志州誌篇ニ標ノ此ニ省ケリ其條ニ詳ニセリ猶紀伊州ニ接ス地アリ

當時ハ混スルニ至ル山家集西行錦ノ島ノ詠ノ如シ今紀州牟婁郡ニ係レリ新葉集夫木抄新六

帖等此ニ據レリ各今本州ノ所有ニ非ス然レモ紀州地誌ハ方地ハ列リ接ストイヘモ本州ノ所

係ニ非ル故ニ其言ニ暨ハス錦島ノ所詠ハ卷末ニ附ノ其徵ヲ示ス伊勢島ハ別卷志州編ニ載ス

伊勢海ノ所詠左ニ列ス

日本書記第三神武記

伽牟伽筮能伊齊能宇瀨能於費異之珥夜異波臂茂登倍屢之多儂瀨能阿語豫之多太瀨能異波

比茂登倍離于智氏之夜菴務

万葉集三

いせのうみの澳津白浪花にもかつゝみてもか家つとにせん 安貴王

全

いせのうみの磯もとゝろに寄す浪のかしこき人に戀わたるかも 笠女

全

いせのうみの磯もとゝろに寄す浪のかしこき人に戀わたるかも 讀人不知

全

いせのうみの磯もとゝろに寄す浪のかしこき人に戀わたるかも 度四百六十九

いせのうみの海士のしまつのあわひ玉とりて後も戀のしけらん

十一 人麿

いせの海士の朝な夕なにかつくてふ鮑の貝の片おもひして

いせのうみに鳴ける田鶴の音とるも君か聞ぬは我戀んかも

十三 全

いせのうみの朝な支によるふかみるの夕なきによるふか見るの

いせのうみに釣する海士のうけなれや心ひとつをさためかねつる

いせのうみの海士のうけなは打はへてくるしとのみや思ひわたらん

短哥 全

いせのうみの浦の鹽かひひろめ

いせの海士のあさな夕なにかつくてふ見るめに人をあくよしもかな

こゝろみしかきやうにさこゆる人なりといひひれは 讀人しらす

いせのうみにはへてもあまる拷繩の長さ心は我ろまされる

同じ所に宮つかへし侍りてつねに見ならしける女に遣しける 躬恒

全

いせのうみに塩やく海士の藤衣馴るとはすれとあはぬ君かな

業平

いせのうみにあろふ海士ともなりにしか波かきわけて見るめかつかん

れほろけの海士やはかつくいせのうみの浪高き浦に生ふる見るめは

心にもわらて久しくとはさりける人のもとに遣しける 源英明朝臣

いせのうみの海士のまてかたいとまなみながらへにける身をる恨る

すかたあやしと人の笑ければ 躬恒

いせのうみの釣のうけなるさまなれとふかき心は底に沈めり

いせの海士と君しなりせは同じくは戀しきほどにみるかからせよ

鹽たるいせ雄の海士や我ならんさらはみるめを刈よしもかな

礎おろすかたころなけれ伊勢のうみの塩瀬にかゝる海士の釣舟

塩たるいせ男の海士の袖たにもほすなるひまは有と社さけ

續後撰

權大納言實國

權大納言俊忠

前參議教長

土御門院

いせのうみの天の原なる朝霞空に鹽やくけふりどろ見る

大伴黒主

いせのうみの渚をさよみ住鶴の千とせの聲を君にさかせん

讀人しらす

いせのうみの海士のどるてふ忘貝わすれにけらし神も來まされ

讀人しらす

いせのうみの波間にくたす釣のをの打はへ人を戀わたるかな

前大納言基良

いせのうみのみるめなきさはかひもなし涙にひろふ袖のしら玉

高階宗成

我戀はいせ男の海士のかりてはす見るめはかりをちさりなれどや

出羽辨

目一本築花物語のまへにかく荒果るいせのうみをよろの渚とおもひけるかな

藤原兼房

いにしへの海士の住けんいせのうみもかゝる渚もあらしどろふもふ

院御製

いせのうみの海上のうけ繩うけかたき此身をまたはしつめすもかな

僧正行意

玉葉

續拾遺

全

いせのうみはるかに霞む波間より天の原なる蟹の釣ふね

前中納言雅言

新勅撰

いせのうみの網のうき繩我かたに心もひかぬ人に戀る、

家隆

續千載

いせのうみの海士のまてかたまてしはし浪もうらみの隙はなくとも

法眼源承

全

いせのうみや今も天照る神風に道ある浪のよるへをろまつ

權中納言冬敷

全

いせのうみや汐瀬はるかに雲晴て月にろかゝる秋のうら浪

皇后宮兵衛尉

續後拾

いせのうみの海士のもしほ火たくなはの暮れはいとゞもぬ増りつゝ

津守國助

全

いせの海士の霞のこ袖波かけて春の衣も塩馴にけり

爲家

全

いせのうみのあまの藻塩木こりなからからしやけたぬ同じ煙は

風雅

塩たる、伊勢男の海士の恨こるみるめにつけて隙なかりけれ

前大政大臣
伏見院

全

いせのうみの渚にひろふたまくも袖ほす間なき物をころたもへ

崇徳院

全

我心誰にかいはんいせの海士の釣のうけひく人しなければ

入道前大政大臣

全

伊勢のうみの海士のうけ細うさしつみねもふとたにもしる人もかな

藏人左近

全

いせのうみの朝みつ塩のつらければかつき佗ぬと海士もいふなり

道政法師

全

いせのうみの海士の拷縄我かたに心ひかねは来る夜半もなし

前大僧正源惠

全

いせの海士の拾はぬ玉や亂らん沙干のかたに震ちるなり

津守國夏

新後拾

いせの海士の塩やき衣このほどやはすとはいはん五月雨の頃

權中納言雅縁

全

名残われや霞の袖の塩馳て歸るいせ男のあまつ雁かね

大宰大貳重家

全

玉藻刈るいせ男の海士の袖ならばぬるとも人は咎めさらまし

津守國夏

身うつらき伊勢雄のあまの焼塩に見るめ刈る間はこかれやはする

新續古今

左兵衛頼定

全

いせの海士の塩たれ衣馳てたにあかぬ見るめはみたれてるふる

洞院左大臣

全

いせのうみの釣のうけ繩絶ぬれとまた消やらぬ海士のいさり火

中務宗良

新葉

いせのうみに沈まはしつめ身の果よ釣のうけなるさまも恨し

慈鎮

拾玉

いせのうみにかつきあつめて藻塩草ればり亂れぬぬにろ有ける

全

全

かさねおく浦のはまゆふいせのうみや神代の神もうれしとやみん

後鳥羽院

御集

神風やいせの濱邊の曙にかすみ吹よるうらのほつかせ

有家

全

こりすして又や沈まんいせのうみの釣する海士のうけかたき身を

齋宮

全

どはねどもふかき心はいせのうみの底なる海士にれどりやはする

元輔

全

波間わけ見る貝ひろふいせのうみのいつれの方の名残なるらん

元眞

家集

うたかひに猶も頼むかいせのうみの海士の袴繩くりかへしつ

定家

全

いせのうみ玉よる波にさくら貝かひある浦の春のいろかな

家隆

御集

伊勢のうみ入江の草の塩干潟海士も瑩の玉はひろはん

後鳥羽院

全

波にぬるゝいせ男の海士の捨衣忍はぬたにもしほれ合ふなり

順徳院

全

いせの海士の焼藻の煙空にのみうきは思ひの習ひなりけり

全

家集

いせの海士の朝けのけふり空にのみ春もさび行浦ちどり哉

元真

全

伊勢のうみの海士のぬれ衣さぬ人は我など思へは残らさりけり

全

全

いせのうみに名残を高みはふる海士の物思ふ事はぬしも増さらし

貫之

六百番

伊せのうみの海士とならばや君戀ふる心のふかさかつきくらへん

家隆

いせのうみの塩瀬にさはく網石のくたけて物をねもふころかな

全

寂蓮

千五百番

いせの海の底までかつく海士なれや見るめに人をねもふ心は

隆信朝臣

六帖

いかにせん思ひは深しいせのうみに釣する海士のうけひかぬ身を

伊勢

全

いせのうみに年経て住し海士なればいつれの藻かはかつき残さん

辨入道光俊

いせの海士の沙干にあさりもとめたる貝をろ守る身をは捨つゝ

衣笠知家

續草庵集

いせの海士の磯の中道いろけともはや朝潮のみちろしにける

頼阿

續拾遺

いせのうみに汲て塩やく海士なれや思ひはもぬてぬるゝ袖かな

元真

夫木

いせのうみの海士の釣舟春風になころを高みいかに戀ふらん

伊勢のうみ浪にたけたる秋の夜の有明の月に松風ろふく

鎌倉右大臣

思ふかたいせ男の海士の釣竿の長さ夜あかすぬるゝ袖かな

後鳥羽院

宜福門院

全 伊勢のうみの浪のよるく人まつとくるしき物を海士のたぐ繩
顯昭

いせのうみの海士のまてかたならねども戀のうめ木もいとなかりけり

和泉式部

伊せのうみの海士のあまたのまてかたに打や取らん波の花波

行能

伊勢のうみ海士のまてかたゆくかぬり汲ほす鹽の間なく戀つゝ

衣笠内大臣

いせのうみの海士のまてかたかきつめて幾度れなし藻鹽たるらん

讀人しらす

歌林良材

神風やいせの浦端によするなる常世の波や君か代の敷

閑居百首

伊勢のうみや海士の苦屋の紅葉はに舟なかしたる秋風ろ吹

後九條内大臣

建保百首

いせのうみ霞む鹽干のかたをなみ歸るや雁の聲ろ聞ゆる

知家

いせのうみのなきたる朝の春の日に浦くかよふ海士の釣ふね

家隆

全 伊勢のうみの沖津春の朝なさに出へきほどは海士の釣舟

範宗

玉藻刈るいせ雄の海士もいとまなみ長き日も猶わかす有らん

行能

いせのうみの鹽干もしらぬ夕なさに霞をわけて玉や拾はん

康元

伊勢のうみ霞める方にひろふてふ浦の鹽貝手にもたまらす

建保八年百首

いせの海士のねるやうしほの幾かぬりからさ思ひに身をこかすらん

衣笠内大臣

續門葉集 公家御いのりの爲に大神宮にまうて、震筆の御告文をよみたてまつるとて伊勢

の國はとこ世の浪のしきなみよする國なり人のいのちもなかくるへしと御託宣ありける事

をれもひ出て やろちまていのる心はいせのうみや常世の浪の敷にまかせて

前權大僧正通海

天文十一年大神宮法樂千首 波のうへも長閑に見わたいてせのうみや渚にさりぬ友鶴のこね

藤原氏直

あらししき浪風もなしいせのうみや長閑に霞む春の曙

廣橋中納言

中務卿宮

名所拾遺追考

名所海

いせのうみの渚にひろふたましくもわれな藻屑の中にまじりて

全

いはねろすかたころなけいせのうみの鹽瀬にかゝる海士の釣舟

靈元院御製

爲成

勢陽五鈴遺響度會郡卷之十八 大尾

五鈴遺響跋

栗屋老人嘗欲編伊勢志羸疾十數年業未終而没々已六年未亾人某氏抱遺稿圖不墜其志遂謀同志之人校輯成若干卷名曰五鈴遺響凡吾州山川邑里祠宇寺觀道路遠近事蹟物産載錄無遺但

皇大廟及 豐受廟事實關係

朝家大典者別輯爲壹卷更俟他日考訂老人好歌詞特於俳體今所謂狂歌者得意往々爲人所誦而至伊勢志之數舉則人多未知也未亾人克不墜其志老人之功可以不朽矣未亾人之志亦可嘉夫

天保四年癸巳蒲月

正四位荒木田神主經

華印

れもふ事いはてやたゝにやみぬへし我どひとしき人しなればとの御哥を思ひ出雲泥のち
かひはあなれど心のゆくかたは賤の女もあなし事にや侍へらむこたひのふみも夫なるもの
若きころより此道をこのみ世のいとなみのからきをもかへり見侍らて雪ならぬともし火の
元にてしるし置けるをろか儘に打すてたかむもほいなくいかにもして巻につゝ梨侍らはや
ど心を盡しはへれど我どひとしき人もなく長き夜のね覺かちなるまよにれくれし夫と先た
ちしあはれ我子のなからへはしみには宿をかさましと老のくり言くりかへすをいとゝ物う
くれもひけむ孫なるものゝ十餘り三ツの秋の末秋葉の山へ祈りつゝいのれは神もすて給は
て唯何となくれもひたち離珪か誘もあなれどまた白珪のたすけもあらんとこゝろふとくも
苜置し沖津ものかれよこれよとあつむるにさへ袖ぬれて鹽なれ衣ひぬ間なく八十の巻とは
なれりしかはあれど五ツひら十ひらも知りはへらむもさたかならねは又たらさるも侍るへ
しろは老たるといまた年ゆかざるものと只ふたりの心に侍れは見ゆるし給へがし
伊勢の海にふかくもしつむかたし貝人の見るめにかひこころすれ

六十八とせ

天保四とせの五月

安岡八千女

明治三十六年六月廿五日印刷
明治三十六年六月三十日發行

著 作 者 故人 安 岡 親 毅

三重縣津市大字西町五拾四番屋敷

發行兼印刷者 伊 東 太 三 郎

三重縣津市大字西町五拾四番屋敷

印 刷 所 明 有 舎

